



「我が家の経営と 地域農業」



酪農経営：

上越市柿崎区金谷 木下 保氏

昭和57年5月に就職して、はや23年が経過しました。その間に乳牛の能力も大変向上しましたが、果たして自分の管理が充分だったか疑問です。病気や事故等で廃用にした牛、死亡した牛など今まで何頭の牛を飼養してきたのでしょうか？

就農後、粗飼料の作付けを拡大したかったのですが、草地・飼料畑のない地域なので、稲わら収集のためペーラーを購入したり、他集落の集団転作地に酪農組合で共同作付けしたこともありました。

その後、畜産会のコンサルのことで知り、数年間受診しました。結果は散々なものでしたが、3年目には「序々に改善されている」という言葉を頂き、酪農家の先輩や関係機関の指導を受けながら管理の改善を図ってきました。その結果、ここ数年、酪農が楽しくなってきました。飼養管理の改善や牛舎環境の整備等に乳牛が反応してくれ、やればやるほど面白いものだと、今頃になってわかってきました。

さて、家畜排せつ物法が昨年11月から完全適用となり、最初に記したとおり飼料畑がないこの地域にとっては大きな問題です。本来、酪農は自然循環農業を自己完結でできる唯一の職業だと考えていますが、草地がない。そこで、町役場をはじめ関係機関に相談した所、「稲作専業農家が多いグループに声をかけて見れば」というアドバイスを頂き、畜産農家2戸を含む17戸のグループ「ゆうきをもってとりくむかい」を発足できました。堆肥舎1棟に、自走式マニユアスプレッダ・キャリアブリッジを購入し、堆肥を水田に還元する体制ができました。

現在2年目ではありますが、利用も順調に増え、堆肥は問題なく処理できるようになりました。今年になって有機栽培米の取り組みも始まり、おいしい上越米生産のため、よりよい堆肥を生産して行こうと思っています。経営を取り巻く環境は厳しく課題も山積していますが、一つ一つ解決し、消費者に見てもらえる牛舎を目指し、地域の農・畜産業の一員として頑張っていきたいと考えています。

「今思うこと」



養豚経営：

十日町市野口 丸山スミ子氏

23歳で養豚農家に嫁ぎ、早34年の月日が経ちました。全くの未知の世界でしたが、ただ夢中で過ごして来ました。結婚した翌年に義父から農業経営を譲り受けました。そして、出産、育児、介護と慌ただしい生活の中で主人と二人での養豚経営でした。休日はもちろん盆も正月もない日々でした。その中ですこしづつ規模拡大して、昭和59年に(有)花田養豚場を設立しました。自分達の時間はほとんどない生活でしたが、一生懸命やればやった分、豚も頑張ってくれました。その後地域の仲間と妻有畜産(株)を立ち上げて飼料の共同購入、防疫体制の確立、HACCP方式の品質、衛生管理を実施してきましたが、私にとって一番心強かったのは同じ仕事をしている女性同士で悩みを話し合えることでした。そして、我が家の養豚場では、若くて動物好きの青年3人が仕事に参加してくれました。また2年前から従業員教育の一環として、畜産協会のコンサル指導を受け、データを取りながら農場成績を把握し、課題を検討しながら仕事に取り組んでいます。現在、妻有畜産グループの仲間全員が「クリーンポーク生産農場」として認定を受けました。我が養豚場で生産された豚肉を自分達の子供や孫に自信を持って食べさせることができるという自負を持ちながら日々の仕事に励んでいます。今日もこの暑い夏、いかに成績を落とさず、しかも健康な豚を飼育するか、知恵を出し合いながら頑張っています。若い時は休日もなくただ働くだけの生活にため息をしながら過ごしていましたが、でも今は、若い従業員3人のお蔭で私達夫婦はそれぞれ時間を持てるようになりました。そして、まだこんなに夢中になって、仕事ができる自分に心から幸せを感じています。